

実習報告（基盤教育実習）

## 高等学校の保健授業における生徒のエンパワーメントを引き出す授業開発

白根 直樹 （授業実践探究コース）

### 1. 探究実習のテーマと設定の理由

高等学校保健科目の目標は、文部科学省(2009)による「個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるようにし、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる」である。この目標を基に、保健授業を進める過程としては、生徒が個人生活及び社会生活における健康・安全に関する内容を総合的に理解することを通して、ヘルスプロモーションの考え方を生かし、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく思考力・判断力などの資質や能力を培い、実践力を育成することが目指されている。

これらを踏まえ、保健授業推進委員会(2013)によると、全国における高等学校の保健授業に関する生徒の実態としては、保健に関する「知識」の習得状況は、男子 64.4～70.3%、女子 70.3～72.9%であるが、保健に関する「思考・判断」の状況は、男子 28.2～31.2%、女子 29.8～34.0%と、「知識」の習得状況よりも低調である。このことは、保健科目の目標を目指して保健授業が成立する上で、生徒たちの思考力・判断力等を身に付けさせることを重視した指導の改善をしていくことが課題として挙げられる。だが、保健授業の在り方としては、生徒の思考力・判断力等だけに重視した授業の改善を図ることが保健授業の在り方ではないと私は考える。このことは、保健授業推進委員会(2013)も述べるように、思考力・判断力等を育むためには「授業の中で習得した知識を活用する学習活動を積極的に取り入れて思考力・判断力等を促すことが強く求められる」ということを参考にして主張する。すなわち、今後の保健授業の在り方としては、保健授業の課題とする生徒の思考力・判断力等を育むためにも、生徒が健康や安全に関する知識を習得し、その知識を活用しながら思考力・判断力等を育成していく授業形態が必要だと私は考える。

これらの上記を踏まえ、本研究では、生徒が保健授業の中で習得した知識を活用しつつ、生徒の思考力・判断力等を育む授業を開発していく。その際に、森田(1998)によるエンパワーメントを援用していく。理由として、エンパワーメントは「すべての人が持つそれぞれの内的な資源(リソース)にアクセスすること」と定義し、加えて「自分が持っている才能や知識を利用できること」と意味づけしている。このことを、高等学校における保健科目の立場に置き換え、今後の実生活に向けて、生徒が保健授業で習得した健康や安全に関する知識を活用し、実生活における健康や安全に関する課題を発見・解決することができる思考力・判断力等などの資質・能力を育成することができるのではないかと考えるからである。

したがって、エンパワーメント理論を援用し、保健授業における生徒のエンパワーメントを引き出す保健授業を検討していくことを大学院2年間の目的として研究する。

### 2. 探究実習の研究目標

- (1)実習校における授業形態の実態把握及び生徒の実態把握
- (2)生徒のエンパワーメントを抑制する外的要因を把握
- (3)生徒のエンパワーメントを引き出す授業形態を検討

### 3. 探究実習の概要

□実習校における授業形態と生徒の実態把握

研究対象は、S県立S高等学校(以下、実習校とする)の第1学年の生徒が中心である。実習では、指導教員や他の保健体育科教員の保健授業を参観しつつ、自らも保健授業を実践した。その際に、保健授業の形態や生徒の保健授業に対する姿勢や態度を考察することを併用して実践した。

□生徒のエンパワーメントを抑制する外的要因を把握

エンパワーメントを抑制する外的要因として「比較」「差別」「偏見」などを挙げ、それによって内的抑圧を起こしてしまうと述べている(森田,2003)。このことを、実習校の保健授業に置き換え、生徒のエンパワーメントを抑制する外的要因を検討する。

□生徒のエンパワーメントを引き出す授業形態を検討

エンパワーメントを引き出す具体的方法として3つ(気持ちを表現する・人の力を借りる・行動の選択肢)を挙げており、子どもの問題解決力を育成するために支援者ができることだと述べている(森田,2003)。このことを、実習校の保健授業に置き換えて授業形態を検討していく。

#### 4. 探究実習の成果と課題

□成果

1. 実習校の授業形態は、知識を生徒に教え込む授業形態(知識—伝達型授業)が主であると観察法により考察した。このことから、生徒たちは単に授業で取り扱われた知識をワークシートや保健ノートに記述するといった授業の取り組み方であり、生徒からの発問や質問などをするといった言動が少ない傾向が見受けられた。加えて、生徒たちは学習内容で扱われる健康や安全に関する課題等に対し、一人一人が思考を活発に働かせながら授業に取り組む様子は見受けられなかった。

2. 「知識-伝達型授業」による授業形態が生徒のエンパワーメントを抑制する外的要因に値すると考察した。この場合、生徒たちは学習内容を理解するのではなく、単に学習内容を「覚える」といった暗記傾向に陥り、さらには時間が経つと、保健授業で学習した内容を「忘れる」ことに繋がると言われている(日本保健科教育学会,2017)。このことから、生徒たちは実生活における文脈や状況の中で生きて働かない知識を身に付けることになると考える。さらには、保健授業における生徒の思考力・判断力等を促す機会を抑制し、生徒の思考力・判断力等を育むことを阻害する授業形態になってしまうのではないかと見解する。したがって、「知識—伝達型授業」から脱却する必要があると考察する。

3. 生徒のエンパワーメントを引き出す授業形態としては、個々で保健授業に参加するよりも他生徒、あるいは教師と対話的に保健授業に参加することがエンパワーメントを引き出せると考察した。対話的な活動は、人の力を借用しつつ、自己の気持ちを表現することを促し、さらには課題解決の際における行動を選択肢する幅が広がる有効な方法だと考える。したがって、生徒のエンパワーメントを引き出すことに繋がると考察することから、対話的な活動を授業形態に取り入れる必要があると成果として挙げる。

□課題

1. 1単位分の保健授業において「生徒と教員」「生徒同士」による対話的な活動の比率をどの程度ほど設定していくのかを課題とする。その際に、各学習内容によって対話的な活動の比率が変化していくと考えるため、今後、各学習内容における対話的な活動形態を検討していく。

2. 評価方法

生徒が習得した知識を活用し、健康や安全に関する課題を発見・解決していく思考力・判断力等がどの程度引き出すことができたかを測定する評価を検討する。その際に先行研究で実施しているエンパワーメント尺度を援用し、高等学校保健授業の視点に置き換えて評価することを検討していく。